

漢字字典を使った、言葉を広げる指導 一人一冊 手元に置いて読む・調べる

一徹国語人

言葉を知る。言葉をよく理解して使う。そうすることによって、自分理解も相手理解も、ぐんと深まる。

教科書でも、言葉遊びをはじめ、言葉そのものを学習する場があちこちに設けられるようになった。また、教師たちの側でも、言葉の学習指導についていろいろ工夫しようとする動きが見られるようになった。

今回紹介するのは、一年生のうちから漢字字典を引く学習を定着させようとする先生の授業風景である。その先生は、「言葉と文字の学習を同時に展開すると、その効果は大きくなる」という信念をもって指導されていた。

◆「雨」を練習しましょう。

先生 「今日の漢字はこれ。」と言って、カードに墨書した「雨」を示す。

児童 □々に「あめ・あめ・あめつぶ・あまつぶ」と言う。

先生 「『雨』を使ったどんな言葉を知っているかな。」

※多くの児童が挙手。先生が指名する。

「雨水・雨ふり・大雨・雨やどり・雨戸」などが次々に発表される。

先生 「『あめ』とも『あま』とも読むんだね。では字典で調べてみましょう。○ページだよ。」

※先生が字典の「1年さくいん」で見つけられることを、児童の机を巡りつつ確認していく。

先生 「筆順が大切だったね。確かめてみましょう。」

※すらすらと書けるまで掌書きをさせ、その後空書き。

先生 「では、ノートに『雨』をていねいに書いて、読み方と言葉（児童が先ほど発表した内容のいくつか）を書いてみましょう。」

※ここで、友達の発表をしっかりと聞けていたかが明確になる。こうした指導を繰り返すと、児童はおのずから友達の発言に耳をかたむけ、内容を聞き分けるようになっていく。

この後に、漢字字典の「雨」の項をめいめいで黙読させ、再度指名音読して、いろいろな漢字の使われ方を理解

させる。この導入に二十分。

さて、これからが本題である。「教科書にのっていない漢字には、どんな成り立ちがあるのか調べてみよう。」と言って、課題の絵文字カードを黒板に提示する。



先生が絵文字カードを示して、「これは何を表していますか。」と聞くと、

「羽があるみたい。」「鳥みたい。」「鳥だよ。」「と児童から声が上がった。先生は、「もともとなった絵と比べてみよう。」「絵文字からどんな漢字ができたんだろうね。」「鳥という漢字はこの鳥の形からできたのね。」と、絵文字の形をヒントに想像させ、「鳥」という漢字に至らせる。同様に、「魚(魚)」「馬(馬)」についても、ものの形の特徴をうまく生かして漢字ができていくことに気づかせていく。

ここでも導入時と同様、漢字字典を引かせ、掌書き・空書きをさせる。点画の注意点を確認させた上で、字形を

整えていねいにノートに書かせる。

さらに、漢字では同じ「...」がついていても、もともとなっていたものがそれぞれ違うことを、三つの漢字を学んだあとでまとめる。絵文字から字典を使った学習へと進み、ノート記入を済ませて、やはり二十分あまりであった。

「鳥」「魚」「馬」は、二年生の配当漢字で、児童にとつて習っていない漢字であるにもかかわらず、どの子も実に熱中していた。

次時への予告は、「次は自分が知りた漢字の成り立ちを調べてみましょう。」であった。児童は、「自分の名前。」「○○ちゃんの名前。」などと□々に言っていた。

一年生がこれだけ自由に喜んで漢字字典を使った学習ができるのであれば、二年生以上ではどのような学習計画を立てることができるか、今この学校ではそれを話し合っているところだと聞いた。

今回お邪魔したのは、神奈川県にある

門沢橋小学校一年一組(三十三名在籍)、参観させていただいたのは、光村図書『こくご一下』の教材「かんじのはなし」に付属させ、七時間かけて展開するオリジナルの学習活動案の一部である。

- 1 教科書の漢字の成り立ちを読みとろう。(二時間)
- 2 いろいろな漢字の成り立ちを知ろう。(二時間)
- 3 漢字の成り立ちのお話をつくろう。(二時間)
- 4 習った漢字を使って文を作ろう。(一時間)

今回の授業は、2の前半で、「教科書にのっている漢字以外の漢字の成り立ちを調べてみよう。」という時間であった。

一徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報部までお便りをお寄せください。
一徹国語人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただきます。お便りがありますので、あらかじめご了承ください。

FAX: 03-3493-5483
E-mail: Koho@mitsumura-tosho.co.jp